

正直に言えば、私は東京大学を目指そうとは毛頭思っていないし、その他首都圏の大学に入学したいとも思っていない。だからと言って、修学旅行のない仙台二高で、なにか楽しい思い出を作ろうとして、この研修に参加したわけでもない。私は、この研修の意味を、「人間的に成長すること」を前提として、学校生活で養われてきた社会的な礼儀や常識的な行動を実践すること、国際化がより進んだ東京で成功を収められた方や、様々な分野の最前線でご活躍されている方などにお話を伺い、刺激を受けることに見出した。

東京へ到着してまず第 1 に、霞ヶ関ビル 35F の、東海大学校友会館にて、「世界のグローバル化の中で、どう備えたら良いか」をテーマとして、ディレクトフォース夏季プログラムに参加した。はじめに、義手を製作するベンチャー企業でご活躍された近藤玄大氏から、お話をいただいた。その後、私たちは、多方面でご活躍されていた、またはご活躍中の方々より、私たちが持っている疑問に答えていただいた。私は、「世界で活躍することとは」という大きな疑問の枠組みをとり、さらにその中で、疑問に答えていただく方の専門分野に合わせた、より細かく、より具体的なことを質問とした。たった 60 分ほどの時間だったが、質問に対する答えのひとつひとつに、私 1 人では考えつかなかったような鋭い考察が含まれており、多くのことを吸収できた。特に印象に残った問答を何個か掲載する。

質問①:(海外を中心に活躍された方へ)異文化と出会うことが、ビジネスへどのように生かされているか教えてください。

回答:日本人は「察する文化」を持っており、ある程度言うべきことを省略しても、相手に細部がはっきりと伝わる。それに対し、海外では「話す文化」を持っている国が多い。よって、念を押したり、議事録やメモを取ったりしながら話を聞くことが求められる。

質問②:世界の現状を知るには、どのようなことをすべきか教えてください。

回答:日本にいながら、世界の現状を知るには、新聞やニュースを見るのが重要だが、そういったメディアにも、報じる内容や、見解に偏りがあつたりする。例えば、世界中に難民は数多くおり、問題となっているが、シリア難民のみがあらゆるメディアに注目され、あたかも全世界の難民がそこへ集中しているかのように報道される。このような難点を解決するためには、できるだけ多くのメディアに触れ、多角的に情報を手に入れることが必要である。また、そのニュースが相手にどのような印象を与えるか、その印象で自分が先入観にとらわれていないかを確認することが必要である。(いわゆる「メディアリテラシー」)

質問③:豊かな発想を育む方法がありましたら教えてください。

回答:物を見るとき、自分が見た反対の面から再び物を見て見ることによって新しい発想は生まれる。日常で使うものの裏面を見て見ると良い。今まで気がつかなかった工夫が分かり、人生が面白くなる。

午後は、各班に分かれて、企業大学訪問に参加した。私たちは、慶應義塾大学医学部付属病院に訪問させていただいた。

慶應義塾大学医学部付属病院への訪問を取り付けるために、私は医局の先生とメールで会話をした。私は今まで、メールで交渉をするということを経験したことがなかった。言葉遣いは適切か、相手に誠意が伝わる文面になっているかなどを十分に注意した。何通かのやりとりの後、慶應義塾大学医学部付属病院のスタッフの方々にご納得いただき、訪問を取り付けることができた。現地に行く前から、礼儀作法が学べたため、班長となったことは、この研修の意味をより深めてくれたと思う。

病院では、まず、脳神経外科の先生が、あらかじめ送付していた私たちの質問に答えた手紙をくださった。この問答も、ここに掲載する。(要約あり。)

質問:研修医を見ていて感じた、今の世代に求められていることを具体的に教えてください。

回答:初期研修医は、自分で働く病院を選択できる期間です。医学生のうちに自分でいろいろな病院を見学し、病院の特性を見学して、自分にあった病院を選ぶことができるので、これは制度であると思います。初期研修医は、いろいろな科を回り、総合的な知識を得る期間ですが、それも限られた時間でいろいろなことを学ぶ必要があります。その科のすべてをその期間で学ぶことは到底できないので、今いる患者さんから学べることを受け身ではなくて、手技・知識を積極的に得ようとする姿勢は大事だと思います。私もちょっとしたことでもメモをして、復習する時間を設けるようにしていました。

その後、その場で疑問に思ったことにも答えてくださった。例えば、脳を切り取る手術では、麻痺が出る可能性がある。その際は、患者と十分に話し合い、治療の方針を決定するのだそうだ。また、手術による麻痺を極力避けるために、患者が起きた状態のまま、切り取ることでできる極限の場所を見つける方法もあることがわかった。

病院の先生方は、私たちが少しでも医療について学べるように、研究室を案内して下さったり、エコーや送管の実技体験をさせてくださった。

研究室では、RNA を解析する機械や、マウスを利用した抗体に関する実験をしていた。抗体がないマウスは、それがあつたマウスに比べて、脳腫瘍に侵されており、頭が腫れている。

た。(頭が腫れたマウスは、数日のうちに死んでしまうらしい。)RNA 解析は数十年前に導入された、比較的新しいものであると先生がおっしゃっていた。

実技体験のエコー、送管は医師がまずはじめに身につけなければならない技術であり、模型を使って訓練するものである。模型にゼリーを塗り、エコーで体内を見る。模型の体内には腫瘍を模した物体があり、それを画面で探し、観察した。画面に映った腫瘍を発見することは私たちにとって難しく感じたが、先生はいとも簡単に発見していたので、驚いた。送管は口と口とを接触させる人工呼吸に代わる作業である。模型の口を開けさせ、食道でなく、気管に管を通すことは、見ている時より難しく、間違えずに送管できたのは、8人中2人だった。その後、病院の中を少し案内していただき、慶應義塾大学医学部付属病院への訪問は終了した。

その日の夜は、首都圏の大学に通われている、二高のOBの方々より、お話をいただいた。年齢の近い方々との対話は、即座に身をもって実感できる意見があり、大変参考になった。

ディレクトフォースや、病院訪問で緊張した密度の濃い1日であったが、それだけに、訪問前に掲げていた「人間的に成長する」ことは達成されたと思う。

2日目は、東京大学の見学をした。最初に駒場キャンパスを訪れた。ここでは、東大に通っている大学生が、自分の進路を見つめ直すための講演をしてくださった。私もこの講演を通して、自分の視野がいかに狭いかを感じることができ、進路について再検討する良い機会が与えられたと思った。

午後は、本郷キャンパスへ移動し、文系、理系に分かれての見学だった。私は理系志望なので、農学部の見学をした。この中で、私の印象に深く残ったのは、水族生理学研究室である。ここでの研究は、高校生では理解しがたい複雑なものが多いが、見学では私たちに分かりやすいように、海水魚、淡水魚について話ししてくださった。海水魚は、エネルギーを使って体内から塩分を除去する能力があり、塩分濃度が低い環境下で海水魚を飼育すると、エネルギーが節約でき、育ちが良くなるそうだ。また、淡水魚はエネルギーを使って水中から塩分を集めるそうだ。淡水魚も塩分濃度を少し濃くすると、育ちが良くなるらしい。

私は、農学部とは作物を栽培し、収穫をする農家のような人材を育成する機関だと思い込んでいた。しかし、ここは、生物の体の仕組みを様々な分野に関連付けて研究する場所であるということに気付かされた。

この2日間で得たことは、あまりにも大きく、すぐに自分の力へ変換することは難しいだろう。だが、私は時間をかけて今回の研修で得た知識を復習し、将来に役立てていこうと思う。

抗体に関する、マウスを用いた実験。



送管の様子



上:見学させていただいた研究室の様子

下:エコー検査体験の様子

